

## ガラテヤ書3章15-29節 「律法の役割」

### 1A 約束の有効性 15-18

### 2A 違反を示す律法 19-22

### 3A 信仰までの養育係 23-25

### 4A キリスト・イエスにある者 26-29

## 本文

聖書通読の学びですが、私たちはガラテヤ書 3 章まで来ています。3 章の 14 節まで見てきましたので、今朝は 15 節以降を一節ずつ見ていきたいと思います。メッセージ題は、「律法の役割」です。ガラテヤの人たちは、初めに福音を信じた時は、本当に、神のことばを聞いて、それを信じただけで救われました。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されました(3:1)。そして御霊を受けたのです。御霊を受けて、彼らはさぞかし、喜びに満ちたことでしょう。ペテロは、第一の手紙で、「1:8 ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」と言っています。

そうやって、ただ信じただけで祝福を受けていたのに、後から来た教師たちによって、「まだ、あなたはまだ不十分なのです。これこれを行って、救いを達成しなさい。」と言います。いろいろな、規則を行っていき、それで喜びはなくなっていたことでしょう。私たちは、信仰によって始まったのだから、信仰によって生きること。御霊によって始まったのだから、肉で完成させるのではなく、御霊のうちに留まることを学んでいます。そこで、パウロは、信仰によって義と認められたアブラハムのことを話しました。そして、アブラハムに、すべての異邦人が祝福を受けるという約束がありました。それで、私たちも、信仰によるアブラハムの子として、その約束を受け継いでいるのです。

そこでパウロは、後半部分で、信仰と律法との関係話をしています。これまで、前半でも律法と信仰の関係について話しましたが、律法によっては、すべての人が呪いの下にあると言っていました。信仰によって祝福されるのだと話していました。けれども、それを間違っって受け止める人たちがいます。信仰によって生きるのは、神の命令に従うことと正反対のことだと受け止めるのです。信じるだけでいいのだから、律法は関係ないと考えます。こういう話を聞いたことがあります。売春婦の人が、イエス様を信じました。それで、毎週日曜日、熱心に通っています。けれども、売春は続けているのです。どうしてか？「日曜日が来れば、そこで罪が赦されますから。感謝なことです。」信じるということと、神の命令に従うことは相反すると思っています。

では、「信仰だけではだめなのだ。律法も守り行って、それで天国に行けるのだ。」としたら、それは大間違いなのです。じゃあ、どっちなの？となるでしょう。信仰と律法との関係を、パウロが解き明かします。

## 1A 約束の有効性 15-18

<sup>15</sup> 兄弟たちよ、人間の例で説明しましょう。人間の契約でも、いったん結ばれたら、だれもそれを無効にしたり、それにつけ加えたりはしません。

ここでパウロが説明しているのは、日常生活における契約を使って、契約がいかにも有効であることを説明しています。この「契約」は、ギリシア語では「遺言」と訳すことのできるものです。契約として遺言は、それを変更したり、無効にしたり、付け加えることはできませんね。

<sup>16</sup> 約束は、アブラハムとその子孫に告げられました。神は、「子孫たちに」と言って多数を指すことなく、一人を指して「あなたの子孫に」と言っておられます。それはキリストのことです。

人間の契約や遺言において、その条項が無効にされたり、付け足されたりすることがないことを確認した上で、今度はアブラハムへの神の契約の中にある約束を、ここで教えています。アブラハムがイサクをいけにえとして献げようとした後に、主が約束を確認されました。「創 22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。」子孫が夜空の星のように増える約束もされましたが、この箇所では、単数「子孫に」となっています。

ここでは大きな意味を持っています。アブラハムのひとりの子孫によって、全ての国々が祝福を受けるという約束は、既に神が創世記 3 章 15 節の中で、「女の子孫によって、蛇の子孫の頭を打つ」という約束の中にあることを示しています。「創 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」これはキリストの預言なのです。エバを惑わし、アダムが罪を犯して、神から離れてしまったその人類を、女の子孫によって、その仕業を打ち砕くという罪の贖いの約束です。そして今、アブラハムの子孫、キリストに受け継がれていることを示しています。

<sup>17</sup> 私の言おうとしていることは、こうです。先に神によって結ばれた契約を、その後四百三十年たってできた律法が無効にし、その約束を破棄することはありません。

出エジプト記 12 章 40 節において、イスラエルの民がエジプトにいた期間が 430 年であると書いてあります。アブラハムに対する契約は、エジプトに下ろうとしているヤコブに対して継続して与えられました(創世 35:1-12)。ですから、アブラハムへの約束が有効で、それに律法によって取り消されることはないし、無効にされることはないのです。

ユダヤ主義者らは、アブラハムへの約束は後から来た律法に取って代わったと教えました。ユダヤ教の教えが、律法を守り行うことに集中しています。けれども、それはあり得ません。約束が

あって、それはモーセによって律法が与えられていた時にも有効です。律法が与えられた時のことを思い出せば、注意深く見れば、それが義と認められるために与えられたのではないことが分かります。シナイ山で与えられましたね。その時はすでに、エジプトから贖い出された後です。つまり、神によって救われています。その後で律法が与えられています。十戒の始まりは、「出 20:2 わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、【主】である。」です。救われた者が、これこれを行いなさいと命じられたのであり、この掟によって救われるのではないのです。

律法が与えられても、人々は信仰によって生きることには変わりなかったのです。信仰とは、生きた神との交わりです。人格をもって信頼することです。ヘブル書 11 章を見れば、旧約の時代の聖徒たちが数多く出て来ています。彼らがみな、信仰によって生きたことが証しされています。律法を受け取り、人々に与えたモーセ自身も、信仰によって生きました。ですから、私たちが、信仰をもって救われた後で、自分の行いによって救いを達成するのだということが、いかに間違っているか分かると思います。

<sup>18</sup> 相続がもし律法によるなら、もはやそれは約束によるものではありません。しかし、神は約束を通して、アブラハムに相続の恵みを下さったのです。

ルターのガラテヤ書の注解書には、良い例えがありました。裕福な人が、一人の子を自分の息子として養子縁組にしました。時が来たら、その子は全ての財産の相続者となります。何年かしてから、老人になったその人は養子にしている息子に、自分の扶養を頼みます。そして、その扶養を行いません。そうすれば、息子は、自分がお父さんのお世話をしたからその相続を受け継ぐ資格があるのだ、と言えるでしょうか？違いますね。これが、「神のアブラハムへの約束は、律法を行ないによって受け継ぐのだ。」と言っている人の間違いなのです。信仰によって義とみなされるのに、後になってきた律法に取って替わるものではないのです。(原文: Let me illustrate. A man of great wealth adopts a strange lad for his son. Remember, he does not owe the lad anything. In due time he appoints the lad heir to his entire fortune. Several years later the old man asks the lad to do something for him. And the young lad does it. Can the lad then go around and say that he deserved the inheritance by his obedience to the old man's request? How can anybody say that righteousness is obtained by obedience to the Law when the Law was given four hundred and thirty years after God's promise of the blessing?)

ですから、ここでパウロは、「**相続の恵み**」という言葉を使っていますね。父が子に相続させる時に、その関係があるから相続させるのであり、恵みなのです。自分で働いて勝ち得たものではない。受けるに値しないものを受けているのです。

## **2A 違反を示す律法 19-22**

<sup>19</sup> それでは、律法とは何でしょうか。それは、約束を受けたこの子孫が来られるときまで、違反を

示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたものです。

ここから、「律法」の役目をパウロは論じます。律法が信仰に取って替わったのではなく、付け加えられました。アブラハムによって約束が与えられ、そしてモーセによってイスラエルの民は契約を結びました。けれども、アブラハムへの約束は有効なのです。では律法の役目は何か？「違反」のためです。罪や悪を示し、自分の中身をあぶり出すためのものです。そして、自分が神に逆らっていること、罪を犯していることを示す者です。そして、約束を受けたこの子孫、すなわちキリストを信じる信仰に至らせるためであります。

私たちのキリストは、罪に定めるためではなく、裁くためではなく、救うために来られました。アブラハムの子孫として、この方によって救いが来ます。この方を信じることによって救われます。ところが、「救いは必要としない」と私たちは思います。自分は殺人を犯していない、盗みもしていない、人様に迷惑をかけるようなことはしていないと思っています。自分には何か自分を救えると思っていて、自分で何とかしようと思っ生きています。そこで、キリストを信じる必要はないと思うのです。

主イエスは、そこで律法を捨てるところか、むしろ成就するために自分は来た、と言われます。律法学者やパリサイ派を教師として仰いでいるユダヤ人たちに対して、こう言われました。「マタイ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」「5:20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」そして、彼らが殺してはならないと教えている時に、「兄弟を馬鹿という者は、最高法院(Sanhedrin)に引き渡れます。」と言われ、「姦淫してはならない。」と教えている時に、「5:28 情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。」と言われました。自分はまだ正しさが残っていると思っている者たちは、イエス様の教えられる律法によって、確かに神から切り離され、地獄に投げ込まれるべき者であることを悟るのです。

イスラエルの民が、その契約を与えられた時のことを思い出しましょう。主がモーセに対して、「出 19:5 今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあっ、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。」と言われました。イスラエルの民は、「私たちは【主】の言われたことをすべて行います。(19:8)」と言っ答えました。ところが、主が天からシナイ山に降りてこられて、雷と稲妻、密雲、角笛の音が鳴り響き、主が火の中におられました。そして民に対して十の戒めを与えられました。彼らは、その光景を目撃して、その声を聞いて、たじろきました。そしてモーセに言います。「出エ 20:19 あなたが私たちに語ってください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお語りになりませんように。さもないと、私たちは死んでしまいます。」自分たちが、直接、主から聞くことはできない。恐ろしすぎて、主に近づけないと言いました。自分たちは、主に言われたことを聞きますと言っ矢先に、

彼らは聞くことはできない、と言い直したのです。これが律法の働きです。違反を示すものです。

そして律法が与えられた経緯ですが、「御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。」とあります。シナイ山の上に主が天から降りてこられた時、その火においては御使いがいたということになります。御使いが神の栄光を携えて律法をモーセに与え、それから、イスラエル人に伝えられたということになります。ステパノがサンヘドリンの指導者たちに言いました。「使徒 7:53 あなたがたは御使いたちを通して律法を受けたのに、それを守らなかったのです。」

<sup>20</sup> 仲介者は、当事者が一人であれば、いません。しかし約束をお与えになった神は唯一の方です。

律法においては、神との間に、御使いがいて、そしてモーセがいて、そしてイスラエルに渡りました。けれども、神が約束をアブラハムに与えられた時に、そのままアブラハムに語られ、アブラハムは直接、神からその約束を受け取りました。神ご自身が当事者であり、仲介者は必要なかったのです。ですから、律法の場合は違反を示して、人と神を引き離し、仲介者を必要とするのですが、約束の時は必要とせず、信仰をもって受け止めることができます。

私たちが、自分の信仰生活について、他の人に任せてはいけません。他の人が祈ってくれるから大丈夫。他の人が聖書読んでいるから、その解説を聞いていれば大丈夫。主ご自身に、信仰によって日々近づかないといけません。

<sup>21</sup> それでは、律法は神の約束に反するのでしょうか。決してそんなことはありません。もし、いのちを与えることができる律法が与えられたのであれば、義は確かに律法によるものだったでしょう。

神の約束が祝福を与えるものなのに、それに反して律法は違反を示すものならば、律法は神の約束に反することになるではないですか、という反論があるでしょう。ここは大事な議論です。問題は律法そのものにあるわけではありません。パウロはここで、律法を守ることができるなら、たしかにいのちを与えることができ、義と認められると言っています。ガラテヤ 3 章 12 節で、レビ記 18 章 5 節を引用して、「律法の掟を行う人は、その掟によって生きる。」と言っています。

ロマ 7 章では、パウロはこのように言っています。「7:12-13 ですから、律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。13 それでは、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、罪がそれをもたらしたのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされました。罪は戒めによって、限りなく罪深いものとなりました。」律法そのものは良いものなのです、そこには神の善、聖さ、正しさが啓示されています。けれども、神の良さ、聖さ、正しさが律法によって、鏡のように自分

を映し出し、罪が罪として見えてくるのです。

<sup>22</sup> しかし聖書は、すべてのものを罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人たちに与えられるためでした。

「聖書は」と言っていますが、これもロマ書のほうを見るとはっきり出ています。ロマ 3 章に、旧約聖書からいかに人々が罪の下に閉じ込められているかが書いてあります。義人はいない、ひとりもない。すべての人が迷い出た。善を行う人はいない。だれもない、というような言葉です。

そして、いのちではなく、罪によって死に定められていることを教えている律法が、どうして信仰に対立することがないのか？それは、「約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人たちに与えられるためでした。」と言っています。これが、十字架につけられたキリストが、確かに、律法の要求である死を満たすことを知り、キリストの十字架の死を信じる信仰によって、アブラハムの約束が与えられるようにするためなのです。

### **3A 信仰までの養育係 23-25**

<sup>23</sup> 信仰が現れる前、私たちは律法の下で監視され、来たるべき信仰が啓示されるまで閉じ込められていました。

この「信仰が現れる前」というのは、キリストの十字架と復活の以前ということです。その時は、二つのことがありました。一つは、「律法の下で監視され」ていたということです。この監督は、まだ物事をわきまえていない幼子が、しっかりと保護監督の中にいることにより、生きることができるということです。そしてもう一つは、「閉じ込められていました」とあります。これは牢屋のことです。律法によって、自分たちがまるで救いようのない罪人だということを分からせ、それは罪の支配の中に牢獄の中に入れられたということです。

けれども、これは否定的な側面だけではありません。むしろ、積極面が大きかったです。イスラエルの民は、神に対する成熟した信頼関係について、分かりませんでした。そこで、イスラエルの国民生活について、細かいところまで規定を与え、そこにいつも、神がおられることを知るができるようにされました。そして、キリストが必要であることを知るように準備されました。

興味深いことに、キリスト者の二世以降の方とお会いして救いの証しを聞くと、そうした話が出てきます。主の命令を聞く時に、主に愛されたから、この方に従いたいと思って命令を守るのですが、幼い時に、「この命令を破ると、地獄に行ってしまうかもしれない。」と恐れがあつて、それで守っていった、というのです。地獄が身近なんですね。私の場合は、地獄が身近ではなく、もう当たり前

に地獄行き！だと分かっていたから、そんな悩みなかったです！でも、心が、信仰によって、

御霊によって新たにされないままで、神の言葉を守ろうとするとそのようになります。その監督の下から、今度は信仰が与えられるようになるのです。

<sup>24</sup> こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。

ここの「養育係」とは、保護監督のような意味合いを示す言葉です。例えば、主人の子どもを学校にまで送り迎えするところの奴隷がいました。つまり律法は、私たちがイエス・キリストのところまで導く働きをしている、ということです。

イスラエル人たちは、律法に違反したときに、動物をたずさえて、それを罪のためのいけにえとしました。その頭に手を置き、それから祭司が動物の喉を切り、血を流し、それを祭壇にも振りかけ、肉は祭壇の上で焼かれました。これらのいけにえを見つ、イスラエルの民が、やがて来られる罪を取り除く方が来られることを、切に願い求めように律法は意図しました。「メシアよ、来てください」と必死になって祈りも求めるように、律法は意図してあったのです。したがって、イエス様が来られたとき、「わたしは、律法と預言者を成就するために来ました。」といわれたときに、律法の目的は達成されました。また、ナザレの会堂では「今が恵みの時です。」と宣言されました。律法の目的が達成されたので、恵みの時なのです。そしてメシアとしてこの方を受け入れ、信じます。このことが義と認められるのです。

<sup>25</sup> しかし、信仰が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいません。

キリストを信じて、受け入れるという信仰が現れました。養育係の下にはいません。しかし、私たちは信仰をもってしても、まだ罪の性質がこの中にあります。肉があります。それで、その負い目を感じるので、再び養育係の下に移りたいと願ってしまうのです。いろいろな規則があれば、そのほうが逆に安心します。実は信仰のほうが、自分自身の罪と戦わなければいけないことがよく分りますね。規則は、規則を守っていればそれでよいのです。けれども、信仰はありのままの自分が、神の前に出ないといけません。ごまかしがきかないのです。罪は罪として露わにされます。冒頭で、信じているから、罪を犯していても大丈夫だというようにならず、むしろ逆で、信じているから罪が罪として明らかにされ、キリストにあって生きなければいけないことを思わされるのです。律法にはできなくなっていることを、御霊によって、信仰によって私たちは行うようになっていくのです。

しかし、この負い目がありますから、自分が律法の行ないによって贖いたいと思ってしまうのです。それで、あらゆる異端が忍び込みます。その負い目を利用して、自分たちのほうに引き寄せようと忍び寄ってくるのです。恐れや自責感を使って、縛り付けようとするのです。

#### 4A キリスト・イエスにある者 26-29

26 あなたがたはみな、信仰により、キリスト・イエスにあって神の子どもです。

ここから、前回、学んだ箇所に入ります。これまでは、律法の下にいた時は、養育係の中にいる子供のようにありました。けれども、信仰に入り、「キリスト・イエスにあって神の子ども」となっています。これは、相続を受け取る年齢に達している大人の息子の意味合いがあります。キリストを信じ、この方に従い、その愛の関係に入っている人は、神の国の相続の約束を得ています。その豊かさを、信仰によって前もって味わっています。律法の中に生きていれば、自分がどれだけ正しくなっているのか、神に義と認められるのかがいつも中心になっていますが、信仰によって、すでに義と認められた者として、神の恵みの豊かさを味わうのです。

27 キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。

キリストを着た、というのは、ちょうど放蕩息子が、父から上着があてがわれたように、父のものを受け継ぐことを示す上着のことです。キリストを、神の御国を豊かに受け継ぐ恵みを示しています。バプテスマがそれを示しているんですね。キリストの死につき、共に十字架につけら、共に葬られ、共によみがえります。キリストの結ばれた者になるのです。

28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。

これまでは、ユダヤ人になれば神の国を受け継ぐことができると、ユダヤ教では教えられていました。そしてユダヤ主義者は、イエスを信じるだけでなく、ユダヤ教徒になりなさいと教えました。しかし、ギリシア人でもそのまま、信仰によって救われます。前回学びましたが、福音は、人を平等にします。どんな身分の人も、どんな民族も、男性も女性も、すべてキリストにある者、神の子どもとなるのです。そこに差別はありません。ユダヤ教の祈りに、「私はギリシア人ではなく、奴隷でもなく、女でもないことを感謝します。」という祈りがありましたが、それをパウロはすべて否定しているのです。私たちは等しく、神の国の祝宴に招かれています。その恵みの中で、イエス様と食事をするできるようになっています。天に入れば、すべての人が、どんな背景の人も、同じように神とキリストを賛美しています。

29 あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。

ここは、3章のまとめですね。キリストのものであれば、アブラハムの子どもです。アブラハムの子どもであれば、その約束を相続することになります。私たちが信仰によって、この恵みにあずかりましょう。